



社団法人

海外と文化を交流する会

(社) 海外と文化を交流する会会報

2007年10月発行(3ヵ月1回発行)

第36号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

- 日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援
- 貧しい国々での医療活動を支援
- 各国大使館との協力などによる文化講演会の主催



高山辰雄「新月」——この作品は30年前に、(社)海外と文化を交流する会によってオーストラリアに寄贈された25人の巨匠による日本画のうちの1点。高山辰雄はつい先日、2007年9月14日に亡くなった。巨星が亡くなったと各紙で悼む記事が掲載された。高山画伯は1912年に大分で生まれ、1937年に東京美術学校日本画科に入学。在学中の1934年に第15回帝展で初入選。戦後、1946、1949年のそれぞれ日展で特選を受章した。日本画確信の旗手として独自画風を築き、1982年には文化勲章に輝いた。

バングラデシュ滞在記

2006年12月28日から2007年1月7日の間、第43回目のバングラデシュへの医師、医療従事者、短期派遣ボランティア協力者7名のうちのひとりとして参加した高校生の滞在記です。(社)海外と文化を交流する会は、日本のシュバイツァーといわれ、バングラデシュの医療向上に絶大なる活動を続けておられる宮崎亮医師を17年間支援してきました。この事業に対し、今年をもって一応の節目にしたいと考えています。皆様のご理解の下に海外と文化を交流する会が支援してきた意味を、若い目を通して見たバングラデシュの現実を記載することで、状況を少しでもお伝えできたらと考えました。

■バングラデシュが教えてくれたこと

山田夏子 (高校1年生)

「貧しさに苦しんでいる人のところへ行きたい。豊かさに埋もれている自分を見つめ直したい。」そんな想いで今回宮崎先生の医療チームに参加させていただきました。

海外も飛行機も初めてだった16歳の冬休みは衝撃でした。ダッカの空港を一步出て、車のクラクションと人々の怒号に圧倒されていると、私のカメラを引っ張る手が、どきどきしました。生まれて初めて出会った物乞いは、ちょうど私の母と同年くらいの女性でした。2日前、駅で別れた母とダブって見え、その女性の目の鋭さが怖くて悲しくて、逃げるようにして車へと向かいました。

<バングラデシュの人たち>

バングラデシュの人は、本当に明るくて人懐っこい人ばかりです。街も日本の数倍活気があります。ボグラの病院を少しでも歩くと、「家によってけ！」とお誘いがかかります。私はもちろん何の役にも立たないので、手術を見学させてもらったり、患者さんと話したり、お手伝いのシャロミとミヌにベンガル語を習ったり、病院内に住んでいる子どもたちと遊んだり(遊んでもらったり……)と、とにかく人が大好きなのでカタコトの英語とベンガル語で1日中喋り続けていました。最初は緊張しましたがやっぱり同じ人間です。みんなすぐ受け入れてくれました。私達日本人は、日頃の会話やメールでどれだけ言葉にたよっているかがわかります。目と目を合わせたり、笑顔で話しかけることって話す内容と同じくらい大切じゃないかな……と思いました。

<医療の現場>

外来に小さい頃から重い荷物を1日中頭の上に乗せてきたために背骨が曲ってしまった男の子や、栄養が足りずに小さく実年齢にはとても見えない子もいました。この子のような子どもたちがバングラ中にいると思うと信じられない気持ちです。また、不衛生からくる下痢や感染症も多いと聞きました。ジョイランクーラーの病院や道路には、ゴミが散乱してなんともいえない匂いでした。下水道や井戸の整備、公衆衛生の知識で死ななくて良かった人

がどれだけいるのでしょうか。私が今まで感じてきた自由や平等や身の回りの安全といった日本人にとって空気のようなものがこの国では違いました。

伊藤先生の手術を見せてもらった時、伊藤先生の手術が終わるまでいよう！と心に決めたのですが、とても無理で、5時間でダウンしてしまいました。そのあと伊藤先生はもう5時間手術でした。大変な仕事をなさっているのにいつも笑顔を決やさず、周りに気を配り、情熱を持って仕事をしている先生方は本当に尊敬します。

<ジョイランクーラーでの出会い>

日本から、文房具を持ってきていました。学校の友達数十人が集めてくれたものです。荷物の半分は文房具。みんなの想いが詰まっています。その一部を入院している子ども達に配りました。骨折した13歳の女の子にクーピーをあげた時のことです。クーピーは今日本の子どもが小学校に入るときほぼ全員もらうものです。私が小学校のときも特に何の思い入れもなかったのですが、その少女にとっては違いました。目をキラキラさせて、ものすごい興奮の仕方です。私が日本の友達に報告するために写真を撮りたいと言うと、返せと言われたと勘違いしたのか、胸に抱きしめて離さなくなりました。ようやくわかってくれて私に絵を描いてくれました。今の日本のどこを探しても、彼女ほどクーピーをもらって喜ぶ子どもはいないでしょう。私だってそうです。誰でもクーピーを持てる豊かな、けれど感動を忘れてしまった日本の子どもと、一つのクーピーで心の底から喜ぶバングラデシュの子ども、どちらが幸せか私はだんだんわからなくなりました。大人だって日本は毎年3万人以上自殺する人がいるのに、バングラにはほとんどいないとジョイランクーラーのお医者さんが言っていました。私の友達にも精神安定剤を飲みながら毎日を戦っている子がいます。なぜ、豊か=幸せに結びつかないのでしょうか。疑問が残ります。

<ショリブル>

ショリブルは一番心に残った10歳の男の子です。彼は喋ることも食べることもできず、苦しそうに病院の床に寝ていました。太ももは片手で掴めるほど細くおなかだけは張って体は冷え切っていました。腕が細すぎて注射針が入らず、5回目にしてやっと、という状態でした。私は心配でたまらず1日何回も彼のところに通いました。お父さんとお母さんはずーと泣いていました。こんなにも衰弱しているのだからきっと何ヶ月も前から入院していたのだろう。そう思っていました。入院してきたのはその日の前日。なぜこんなに死にそうになる前に病院に連れてこられなかったのか……信じられませんでした。でも、きっとお金がないのでしょうか。なにかがずしんと心に落ちました。これが貧しさなんだ。これが苦しみなんだ。どうにもならないことを受け入れ、誰のせいにもできない貧困という闇を、彼と彼の両親とを通して見ました。ダッカに戻る日、ショリブルはお父さんに抱かれて外に出て行きました。そこで初めて彼の声を聞きました。「アッラー、アッラー、」神様、神様と彼は言ったのです。苦しいとか、何か欲しいとかいうわけでなく、何にもできない豊かな国の私を恨むでもなく、ただ神に祈っていたのです。

<飛行機の中で思ったこと>

進学校に入ってしまったこともあり当然競争社会に放り込まれて、お金や地位や名誉を得ることが幸せで、競争に勝てない自分は駄目な人間だとかたくなに信じていました。でもバ

ングラデシュに行き、たくさんの人の優しさに触れて、今まで当たり前のように生活の中にあったそのような価値観がすーっと消えていきました。名古屋へ向かう飛行機の中で、涙が止まりませんでした。悲しいのか、嬉しいのかわからなかったけれど。

そして、何が幸せかは周りの人が決めるのではなくて、自分の心が決めるのだとわかった気がします。病院で重病の患者さんの手を握った時、生まれたての赤ちゃんを抱きしめた時、泣いている患者さんの家族の肩をさすった時、シャロミにハグしてもらった時、私はテストで良い点を取った時には感じたことのない何か暖かいものを感じました。

これからは、一度あきらめた海外で働くという夢をもう一度目指したいと思います。そして、バングラの人たちが教えてくれた、いつも笑顔でいることや、人に優しく、楽しく生活すること、そして今この時も、貧しく苦しんでいる人がいることを心に留めて、生きていきたいと思います。

<帰国後>

勝手ながら、帰国後、報告会を開かせていただきました。2日間で120人以上の人が来てくださいました。又、7月に行われる長野高校の文化祭で、写真展を行う予定です。

最後になりますが、滞在中お世話になった宮崎先生、伊藤先生、宮尾先生、榊原先生、雅先生、波止さん、愛ちゃん、本当にありがとうございました。また、今回支えてくださったすべての皆さんに感謝しています。

日本再発見——熊野古道

■南方熊楠の故郷、熊野を訪ねて

松岡恒太郎（社）海外と文化を交流する会常務理事

大学を卒業してかれこれ15年、これまで何人かの故人に興味を持ち、その足跡を辿る旅を重ねてきた。ファン・ゴッホ、宮澤賢治、星野道夫、伊藤若冲、南方熊楠、このいずれの方も語り合う機会を得なかったが、私にとっては忘れ難い人々である。今年の夏、熊楠翁がその人生の炎を真赤に燃やした地、熊野を訪れる機会を得た。

新大阪7:35発のスーパーくろしお1号で紀伊勝浦に昼前に到着。千葉、房総半島と同地名なのは、その昔、船で両半島の人々が交易をした名残なのであろう。鯨を採る共通点もある。目に入る色彩の多くが緑、いうなれば緑の洪水である。紀州、熊野の森は深く、濃いというのがまず受けた印象である。

私がかねてから熊楠翁に興味を持っていた。彼に関する本をひっぱり出し、眺めることは

度々あった。ただ、東京に在住していたこともあり、彼のフィールドを訪れる機会は今までなかった。今年から大阪に転勤になり、熊野という土地が自分の身近になったのも、大きな転機である。

熊野は、平安・鎌倉の時代に上皇や女院により熊野詣が幾度となくおこなわれ、藤原定家の「熊野御幸」によりその様子が今の世に伝えられている。我々には、三重の伊勢参りが身近であるが一般化したのは、江戸の世なので、随分最近のことであると言えよう。

そろそろ熊楠翁自身のことには触れなければなるまい。彼が巨人と言われるには、ワケがある。多くの書籍、逸話、エピソードが残っているので彼に近づけば近づく程、書きたいことが洪水のように溢れてくる。自重しなければいくら紙面があっても語り尽くせない。今回はほんの1面をご紹介しますに留めたい。まず、熊楠翁を知っていただく手っとり早い方法として、白浜にある南方熊楠記念館のパンフレットのプロフィール内容を紹介しようと思う。

南方熊楠 I (1867.4.15-1941.12.29)

和歌山が生んだ博物学の巨星、柳田國男と並ぶ民俗学の創始者。19歳から14年間アメリカ、イギリスなどへ海外遊学、10数ヶ国語を自由に使いこなし、国内外に多くの論文を発表。日本にミナカタありと世界の学者をふり向かせた。生涯、在野の学者に徹し、地域の自然保護にも力を注いだエコロジストとしても注目されている。

なんとなく、すごい人ということがおわかりいただけたかと思う。

熊楠翁は、奇人変人であったという風評もある、そう説く本もあるだろう。否、彼をよく知る人、彼をじっくり研究した人からは、一切そういう言葉は生まれてこない。

彼の人生の前半は読み進めるといつもハラハラするエピソードが満載である。

東京大学予備門（現東大）に入るも1年数ヶ月で退学、天下の男といわれたいと決意を胸に旅立ったアメリカで入学したランシング州立農学校も1年と数ヶ月で退学。当時、「わが思うところは涯（かぎり）なし、命に涯りあり、見たき書物は多々、手元に金は薄し」という言葉を残し、意気盛ん真っ只中であったことが窺える。キューバでは「グアレクタ・クバーナ」と命名された地衣新種を発見した。菌類、地衣類に関しては、随分前から興味を持ち始め、その興味は生涯終わるまで続くこととなる。翌年25歳(1892)で渡英、科学雑誌ネイチャーに「東洋の星座」を寄稿、掲載された。その頃、大英博物館の図書閲覧を許可され、民俗、博物学を中心に筆写を開始、ノートは52冊にまで及んだ。孫文と出会い親交を深めたのもこの時期である。また、丁度訪英していた軍艦富士の乗組員達の世話をし、斉藤実（のち大将、総理大臣）をはじめとして将兵の連名の感謝状を得るといったエピソードからも彼の人の一端が感じられる。

33歳(1900)で日本に帰国し、生涯田辺で生活をした。昭和天皇南紀行幸に際して、変形菌などに関して御進講したことを頂点に、彼の菌類、地衣類研究がフォーカスされることも多いが、民俗学に関しての柳田國男と親交や、神社合祀や森林伐採に身体を張って反対した姿を通して彼の興味の源泉、倫理観や生き方が伝わってくる。

最後に熊楠翁らしいエピソードを1つ紹介したい。

“のぼした両足が玄関から見えているのです。そんなとき運悪く来訪者があって、「先生にお目にかかりたいのですが」と言うと、寝ころがったまま自分で、「先生は今山へ採集に行き留守だ」。すると足が見えているのでいぶかしく思い、「本当なのですか」と尋ねると、

「本人自身でそう言っているので間違いなし」と”（父南方熊楠を語る 南方文枝 日本エディタースクール出版部）

こんな熊楠翁に非常に親近感を覚えるのは私だけではなからう。

故文枝氏はその著書の中で、

“誰にも束縛されることもなく、ただひたすら自ら選んだ自然科学の世界に生き抜いた父は、よき時代に生まれ、よき友を得、幸せな生涯を送った人である”と書き綴っている。

熊野は今世界遺産に登録された地となった。那智の滝や熊野大社のすばらしさもさることながら、是非、熊楠翁のゆかりの場所を巡っていただければ思う。そうすると旅の思い出が一層深まり、忘れえぬものとなるだろう。

今回の内容を通し、熊楠翁をより皆様の身近に感じていただけたなら幸いである。

会からの報告 & お知らせ & お願い

■企画委員会にご参加ください

隔月に1回、午後 3:30～5:30、東京・銀座の銀座教会地下集会室で企画委員会をおこなっています。海外と文化を交流する会理事と企画委員会メンバーが小規模に会合を開き、海外と文化を交流する会の活動を話し合うのです。多くの方々がご参加くだされば、ますます活発な、良質な活動を展開していけるものと思います。参加の方は事務局までご一報ください。

■12月7日（金）懇親会をおこないます

年末、12月7日は上記のような企画委員会をおこないます。その後、会場を移して懇親会（忘年会）をおこないたいと考えています。会場予約そして整理の都合上、参加ご希望の方は11月18日までに事務局までご連絡ください。

■会費納入のお願い

2007年度の年会費納入さらに2006年度2005年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。

昨年は「メルボルン日本画展」およびシンポジウム実行という大きな事業を大成功させました。さらに将来、日豪両国の芸術専攻生の教育交流にも発展させたいと考えています。ぜひご支援ください。